

前回、連載第16話では、上町台地界隈をフィールドに「U-CoRoプロジェクト」(※1)を介して広がりがつつあるネットワークと地域資源の蓄積を強みとしながら、地域に潜在する大きな課題のひとつ、災害リスクの軽減に向けた「減災」への意識と行動のエンパワーメントにふれた。減災の基盤となるソーシャル・キャピタルの形成に向けて、外部のネットワークを地域資源につなぐ、減災文化へ

大阪・上町台地発
都心居住文化の創造へ
(第17話)

風土に学び、
紡ぎだされた言葉を共有し、
災害リスクに思いを馳せる

のアプローチをテーマに、2007年から2008年にかけて導入したU-CoRoでの減災プログラムの展開と、地域での連鎖的な動きの生成についてごく簡単にレポートした。

象徴的な事例のひとつが、地域の側からの減災への自問の動きに、地域外の専門家のまなざしが加わるることによって立ち上がっていった「減災キャラバン on 上町台地」(主催：特定非営利活動法人レスキューストックヤード、共催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、應典院、高津宮、からほり倶楽部ほか、協力：CEL

／U-CoRoプロジェクト・ワーキングほか(※2)である。2009年2月、1カ月間に渡って、大阪・上町台地界隈にある寺院「應典院」と神社「高津宮」、お屋敷再生複合施設「練」と市民立の直木三十五記念館のある複合文化施設「萌」を巡回し、U-CoRoのウィンドウ展示でも紹介した「いのちをまもる智慧 減災に挑む30の風景」(※3)のパネル展示とリレートークが4会場を舞台に繰り広げられた。

その後、「減災キャラバン on 上町台地」のドキュメントを、上町台地の風土特性と災害リスクの紹介とあわせ、

「減災キャラバン on 上町台地」の道程から(※4)として、2009年9月7日から2010年1月29日までU-CoRoのウィンドウに展示している(写真1)。

今回第17話では、「減災キャラバン on 上町台地」の道程から」の展示を通して、上町台地の成り立ちと災害リスクを簡単に振り返るとともに、減災キャラバンから紡ぎだされてきた言葉から減災への気づきを見出し、未来の被災地へ思いを馳せ智慧を分かち合う入り口とした。



写真1 U-CoRo ウィンドウ・エキジビション09
「減災キャラバン on 上町台地」の道程から」展示風景

上町台地の成り立ちと災害リスク

「減災キャラバン on 上町台地」の道程から」の展示では、基盤となる上町台地の成り立ちから災害リスクを感じることができるように、縄文時代から古墳時代にかけての大阪平野の変遷図と、現在の上町台地とその周辺の土地条件図を通して、古くからの土地の履歴をたどっている。その延長に、災害リスクを表したハザードマップを示すことで、過去と現在、風土と暮らしが地続きであることを伝えようとの思いからである。以下U・C・O・R・Oプロジェクト・ワーキング(※5)で企画・制作した展示パネルから内容を抜粋紹介する(図1～3)。

■半島から台地へ、上町台地の変遷と現在の大阪

今から約6000年前、地球の海面は現在よりも高く、今の大阪市街地も大半が水面下でした。ただ上町台地だけが半島のように突き出ていたそうです。やがて河川が運ぶ土砂によって台地の北に砂州が伸び、東側の巨大な湾の入口が狭まっていきます。海面の低下もあって湾は次第に縮小し、古墳時代には湖となりました。浅くなった湖周辺はしばしば洪水に見舞われたそうで、記紀には水を外に導くため仁徳天皇が難波の堀江を開いたと記されています。

■上町台地の成り立ちと災害リスク

縄文時代から古墳時代までの大阪平野の変遷図を見ると、平野部の大半が陸地化してから間がないことが分かります。また、上町台地とその東側の河内平野を範囲とする土地条件図では、中央部を走る黄色の帯から300年前に付け替えられる前の旧大和川河道が浮かんできます。さらに、平野部には自然堤防

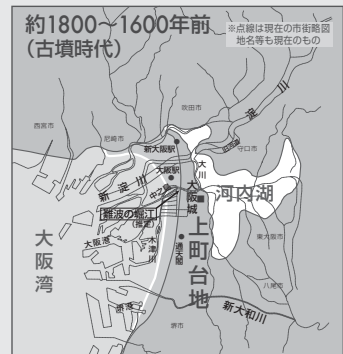
と呼ばれる微高地が点在し、昔の村はその上に立地していることも見えてきます。

こうした土地の履歴を念頭に置くと、ハザードマップの見方も違ってきます。例えば、比較的地盤がしっかりしていると言われる上町台地でも、震度分布に細かい強弱があることがうかがえます。また、内水氾濫時の浸水予想図では台地上にもわずかながら浸水が予想される地域があります。その背景には台地を刻む数々の谷、埋め立てられた池やくぼ地など土地の履歴も影響していることが分かっています。「上町台地だから大丈夫」と過信せず、愛する土地であるからこそ、その変遷を見つめ直し、そこで暮らしていくための覚悟と工夫を怠らないようにすることが肝心ではないでしょうか。

上町台地界限では、1934年(昭和9年)の室戸台風による四天王寺の堂塔倒壊や木造校舎倒壊による多数の児童の死傷、1950年(昭和25年)のジェーン台風による生國魂神社本殿倒壊の被害の後、50年以上の間大災害を経験していない。しかし、決して安心できる状況にあるわけではない。東南海・南海地震は、数十年のうちに確実に発生すると見られる。また、大阪平野を南北に貫く上町断層帯が動けば、マグニチュード7.8の地震が引き起こされると推定され、大阪都市圏で国内最大級の被害が想定されている。

上町台地界限の居住者は、歴史・文化の集積地としての魅力や、公園・緑地、学校や病院等の施設にも恵まれた住環境を享受している一方で、災害リスクへの想像力が高いとはいえない。災害リスクへの想像力の乏しさは、災害に限らず、他者の存在や環境や暮らし全般への想像力の乏しさにつながるものもある。その状況にこそリス

大阪平野の変遷



※「続大阪平野発達史」(梶山彦太郎・市原実、1985年)の資料ほかをもとに作成

図1 大阪平野の変遷

クが宿っているともいえ、上町台地の特性を活かしなが
ら想像力を引き出していく必要性が浮かび上がってくる。

減災への気づきの立ち上がり

2009年2月、「減災キャラバン on 上町台地」がめ
ぐった4つの会場は、寺院、神社、市民立の文化施設、お
屋敷再生複合施設など、いずれも人と人や人と地域のつな
がりに思いを馳せることのできる特徴的な場所であった。
各会場ゆかりの面々に加えて阪神・淡路大震災を経験した
方々を神戸から迎え、いつか来る、その日への向き合い
方について、それぞれの会場ならではのテーマで語り合う
リレートークが展開された(図4)。

リレートーク第1回は寺院「應典院」を会場に、「僧侶の
覚悟 いつか出会う被災死への向き合い方」をテーマとし
て、「大震災に遭遇した僧侶として、今も震災に向き合い
つづけることの意味が説かれ、日常と非日常をつなぐ場所
として寺院が果たしうる役割が語られた」。第2回は複合
文化施設「萌」を会場に、「対話の覚悟 その日をととも
する他者への向き合い方」をテーマとして、「異文化間で
のその日に向けた、(対話の積み重ね)や(共存から共生
へ向かう関係性づくり)など、取り組むべき課題が浮かび
上がってきた」。第3回は神社「高津宮」を会場に、「避難所
の覚悟 避難してくる被災者への向き合い方」をテーマと
して、「震災時の教訓をうかがい、上町断層が動くときに
は大勢の避難所となるだろう高津宮としての覚悟や具体
的な対応について意見が交換された」。第4回はお屋敷再
生複合施設「練」を会場に、「路地の覚悟 長屋のまちでの
その日への備え方」をテーマとして、「長屋のまちで起こ
りうる被害について考え、現実をしっかりと受け止めたうえ
で、減災の智慧を積み重ね、いかにその実を上げていくか

について語り合った」。

リレートークを経て改めて実感した思いや気づきにつ
いて、各回に登場した上町台地の面々のうち4名の方の
コメントを、U・C・O・R・Oでの展示「減災キャラバン on
上町台地」の道程から」の中で紹介している。それぞれの
言葉のなかには、上町台地の風土に根差し、災害リスクへ
思いを馳せ、まちに生き合うための智慧が詰まっている。
以下、「第17話のおわりに」にかえて、コメントの一部を紹
介したい。

第17話のおわりに

「減災は、人と人、人と街とのつな
がりを深めること」、第1回のスピ
ーカーとして登場した秋田光彦氏
(大蓮寺・應典院住職)は、次のように
振り返っている。「(減災)という見
方・考え方を知って、災害に対する意
識がずいぶん変わったような気がし
ます。万が一の緊急対策というより
普段の暮らしについて、丁寧な目を
配るようになりました。だから日常
の光景のなかにある、お寺という可
能性についても自覚ができました。
地域における大事な資源であること
の発見です。(後略)」と。

「必要なのは(話し合う)覚悟、お
互い好き同士になりましょう」、第
2回のスピーカーとして登場した
呉光現氏(聖公会生野センター総主
事)は、次のように問いかけている。

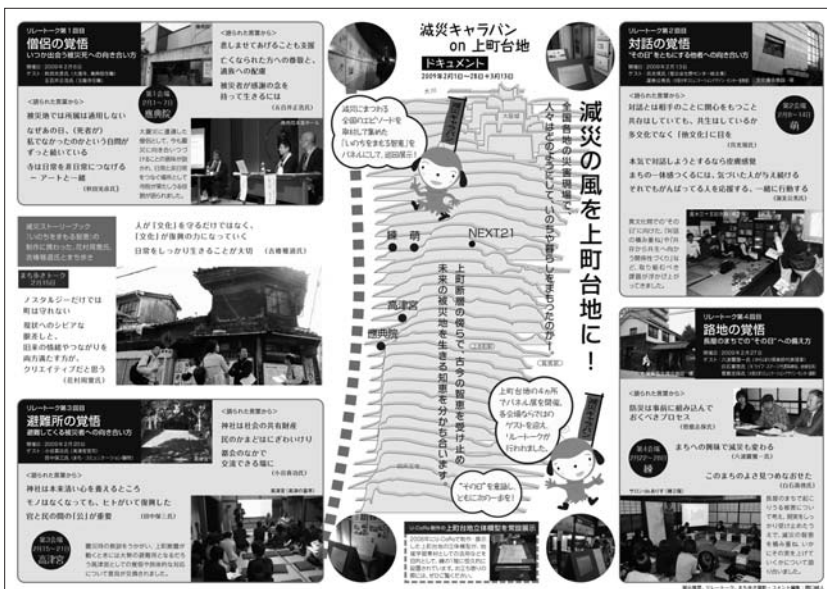


図4 「減災キャラバン on 上町台地」ドキュメント(展示リーフレット[U-CoRo 独案内09]から)

浸水の深さ	0.5~1.0m	3.0~4.0m
0.1m未満	1.0~2.0m	4.0~5.5m
0.1~0.5m	2.0~3.0m	5.5~6.0m

震度 7	震度 5強
震度 6強	震度 5弱
震度 6弱	震度 4以下



図3 内水氾濫した場合の浸水被害

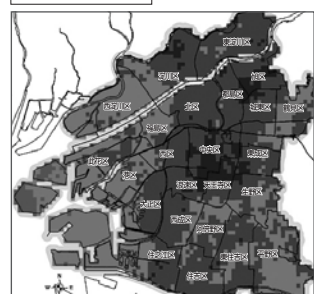


図2 上町断層帯地震で想定される震度

※図2、3 資料出典：大阪市ホームページ http://www.city.osaka.lg.jp/shimin_top/category/700-7-3-0-0.html

「(前略)いざ災害の時、言語・歴史・文化の違うもの同士が対話をするためには日常の(相互関心)が大切。特に多数者日本人は、普段から民族、人種的小数者の声を聞くこと、聞いていることが、(異文化社会での減災)に不可欠である。関心不足の状態が起これば、そこからはじめられない。(後略)」のではないかと。

「いつか来る(その日)に向けた(次)について」、第3回のスピーカーとして登場した小谷真功氏(高津宮宮司)は、次のように展望している。「(前略)都心に位置する高津地区や上町台地にあるマンション等の集合住宅は個々にとつては便利で快適である反面、地域社会との結びつきが希薄になる傾向があります。それ故、神社への祭りや催しで人々が交流できる機会をつくるのが、社会に貢献できる重要な役割の一つだと思われれます。(後略)」と。

「(その日)に向けて、試される人のつながりと地域の力」、第4回のスピーカーとして登場した白石喜啓氏(ライフステージ代表取締役)は、次のように気づきを語っている。「(前略)私が暮らしてきた空堀界限では、街並みとともに今も地域のつながりが残っています。しかし、気がつけばご近所総出の大掃除など、日頃からのつながりの機会が減っていました。減災キャラバンのリレートークではそんな地元の現実に気づかされました。あのあと、いつの間にか姿を消していた防火用水を近所で再発見しました。用水があれば、住民同士力を合わせて初期消火することも可能になります。(その日)をちよつと意識しながら、日常のなかでご近所付き合いを重ねていくことも減災への道だと再確認しました」と。

身近な存在に関心を寄せ、身近な資源を活かす営みを通して、人と人のつながりを再構築していくこと。それこそが減災文化ではないかという共通のヴィジョンを、それぞれの言葉から見出すことができる。「減災キャラバン

on上町台地」という機会を得ることによって、紡ぎだされてきた言葉とヴィジョンを共有し、上町台地のいのちをまもる智慧として育んでいきたいものである。

(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所客員研究員)

CEL

(※1) NEX T21第3フェーズ居住実験の一環としての地域コミュニケーションデザイン実験(U-COROプロジェクト)の概要等は、季刊誌CEL 83号・84号・86号・88号・89号(大阪・上町台地発 都心居住文化の創造へ)(第12話・16話)及びU-COROホームページで紹介している。

<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/issue/cel/>
<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/ucoro/>

(※2) 主催：(特活)レスキューストックヤード、共催：應典院、應典院寺町倶楽部、高津宮、からほり倶楽部、ロジモク研究会、上町台地からまちを考える会、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)、(特活)コリアンNGOセンター、後援：大阪市、(社福)大阪府社会福祉協議会、(社福)大阪府社会福祉協議会、協力：練、萌、六波羅真建築研究室、長屋すつくばくねつとわく企業組合、直木三十五記念館、CEL/U-COROプロジェクト・ワーキング、三婦会、上町ぶんか機構、まちづくり工房など

(※3) 監修：「いのちをまもる智慧」制作委員会、ストーリー/アートディレクション：花村周寛、イラスト：中村妙、解説文：吉椿雅道、編集協力：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)・渥美公秀/関嘉寛/菅磨志保+名古屋大学・宮下太陽、発行：(特活)レスキューストックヤード

(※4) 主催：大阪ガスエネルギー・文化研究所(CEL)、共催：大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、企画：U-COROプロジェクト・ワーキング、協力：上町台地からまちを考える会、應典院、呉光現さん、からほり倶楽部、高津宮、(特活)コリアンNGOセンター、白石喜啓さん、直木三十五記念館、萌、まち・コミュニケーション、吉椿雅道さん、練、ロジモク研究会、そのほかのみなさま(50音順)

(※5) U-COROプロジェクト・ワーキング(2009年12月現在のコアメンバー)：弘本由香里(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所/上町台地からまちを考える会)、橋本護(Bitrain)、早川厚志(まちづくり工房/からほり倶楽部/上町台地からまちを考える会)